

■演題 7 食道胃接合部粘膜下腫瘍に対する腹腔鏡・内視鏡合同手術

代表演者：安福至 先生（がん研有明病院消化器センター）

共同演者：[がん研有明病院消化器センター] 庄司佳晃、布部創也、比企直樹、井田智、熊谷厚志、大橋学、佐野武、山口俊晴

背景

食道胃接合部の粘膜下腫瘍 (SMT) に対する局所切除は技術的に困難であり、通常胃全摘術や噴門側胃切除術が選択されてきた。当院ではより正確な局所切除のために腹腔鏡内視鏡合同手術 (LECS) を開発し、2009 年に食道胃接合部 SMT の治療に導入した。

方法

当院で施行された食道胃接合 SMT に対する LECS について後ろ向きに検討する。

結果

2009 年 12 月～2016 年 8 月までに 10 例の食道胃接合部 SMT に対して LECS が施行された。術前に消化管間質腫瘍またはその他の悪性腫瘍が疑われた症例が 7 例、増大傾向を示した症例が 2 例、出血を認めた症例が 1 例であった。当初縫合不全や狭窄を避けるため、周在が 1/3 以下の腫瘍を適応としていたが、2011 年以降は手縫いによる欠損部の縫合が定型化し、1/2 周性の腫瘍まで適応を拡げることが可能となった。術後早期合併症は認めず、術後在院日数の中央値は 9 日であった。病理組織学的には GIST 3 例（うち 2 例に術後補助化学療法施行）、平滑筋腫 4 例、神経内分泌腫瘍 1 例、未診断が 1 例であった。術後逆流症状の訴えは認めなかった。全例無再発生存中である。

結語

食道胃接合部 SMT に対する LECS は手縫い縫合の導入により 1/2 周性の腫瘍まで安全に施行可能であり、胃の温存を可能とする低侵襲な術式であることが示唆された。